
キツネ国ものがたり

くみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キツネ国ものがたり

【Nコード】

N2070Y

【作者名】

くみ

【あらすじ】

フワフワな動物を追いかけて行くと……落ちる落ちる落ちる！！
！目覚めた先は、え？キツネの国！？！？てか、え？帰れないの！
?!?!ちよい和なファンタジー。

プロローグ

「さむつつつ。」

思わずヒトリゴトを言ってしまう。11月にもなれば、昼はポカポカでも夜は寒いんだな。昼の陽気に騙されて薄着で家を出たオレに、容赦なく吹き付ける冷たい風。

その日、オレは週3で通ってる塾の帰り道を自転車で走っていたんだ。正確に言えば、通わされてる塾…だな。中学二年になってから、何かにつけて高校受験だ勉強だとうるさくなつた母親が勝手に申し込んできたんだから。家に帰ればまた「宿題はやったのか」「復習をしなさい」といちいち言われるかと思うと、寒さでペダルを漕ぐ足が速くなるのは裏腹に家に帰りたくない気持ちがあくらくらんでいく。だから、だつたのかもしれない。ソレが気になつたのは。

「うおつつつ！？」

思わずヒトリゴト…というか叫び声をあげて、反射的に左にハンドルを切り自転車のブレーキをかける。寒い寒いと心中で忙しくなく唱え、疾走するオレの自転車の目の前をゆっくりと何かが横切ろうとしたのだ。キキッと鋭い音をさせて自転車が止まりバツと振り返ると、そいつは動物だつた。何事もなかつたかのように悠然と歩いていく。

「あつぶねえな！！」

もう少しでひいてしまうところだつた。子どもが急に飛び出してきた時のトラックの運転手の気持ちがよく分かる…。

犬か？うーん、なんか違うようだな…と思っていると、それはトコトコと神社の敷地内に入っていく。いや、どっか入ってくなーと思っ

てたらそれは神社だった、という方が正確か。通り道というのは、意外と見てないもので。何度も通っているハズなのに、そこに小さな神社があったのをオレは初めて知ったんだわ。

夜の神社って何か不気味そうだし怖いもの見たさってヤツで、なんだかちょっと気になって自転車から降りてUターンさせる。

神社の入口まで来ると、さっきの動物がフワフワのシッポをフリフリとさせて小さな石の上に座っていた。この神社はいわゆるお稲荷さんだったようで、キツネの石像があるすぐ下にいる。

フワフワしたシッポに誘われて、オレは入口に自転車をとめ、こっそりとそいつの背後に近づいていく。寒いのは忘れていたとしか言いようがない。そのフワフワを撫でてみたい！という欲望が生まれただんだ。野良の動物とは思えない、キレイな毛だったんだ。

驚いて逃げないよう静かに静かに近づいて行き、手をそのフワフワに伸ばして……よし！触ったと思ったその瞬間。パツと視界が消えて。

落ちる落ちる落ちる。

まさに不思議の国のアリスよろしく（ウサギじゃないけど）、動物追っかけてたら急に落ちる落ちる落ちる。そして、いつまで立っても地面に着かない。果てしない落下感に耐えきれず…オレは気を失った。

目覚めたところは

「こんのバカもんがーっ！」
辺りを震わせるような、すごい怒声で目が覚めた。ビクツとして起き上がる。

そこでオレが目にしたものは。

すごい形相で仁王立ちしているオジイちゃん、その目の前に小さな動物。オレが起きたのに気づくと、ジイちゃんはゆっくりとオレに目をやり、小さな動物はぴくつと身体を震わせてオレの方を向いた。オレはどうやら、布団に寝かされていたらしい。状況を理解出来ずに呆然するオレが、そのまま近づいてきたジイちゃんを見て一っただけ状況を理解した。

……コイツ、ネコ耳つけてる。

……。

ゴクリ、とオレがツバをのんだ音がやけに大きく聞こえた。

ヤバイヤバイヤバイ。99パーセント間違いなくこいつは頭がおかしい。動物相手に怒鳴ってたみたいだし、ネコ耳て!!!そしてオレは誘拐でもされたのかもしれない。どうするどうなるどうなってるの!??

パニックにおちいる寸前のオレの側にどっかりと座ったジイちゃんは、オレの目をしっかり見据えてから、ガバツと勢いよく頭を床につける。

「ニンゲン殿！申し訳ない！」

なにになになに！？とパニックで一言も発せないでいるオレに、トドメをさす事態が起きた。こちらを見ていたその小さな動物が、ぴよんつとオレの側まで跳ねてきたかと思うと、緑色の瞳をオレに向けて……喋ったのだ。

「オイラが全部悪いんだ！！ごめん、ニンゲン殿！！」

オレはゆっくりと目をとじ、ごろんと仰向けになって布団を頭までかぶる。これは夢だ。そうだ、夢だ。早く覚める、起きろ自分。学校に遅れるぞ。ぎゅっと目を閉じて、ゆっくり「いち、にい、さんしい……」と十まで頭の中で数えてから、そろーつと布団から頭を出してそーつと目を開ける。ん？緑の宝石？なに？目？？……て！！！！

「ぎゃああああああ！！」

動物がめっっちゃ近くでオレの顔覗き込んでました。

「ぎゃあ！！！！驚かすなよ！！」オレの叫び声に驚いた声をあげるその動物……。やっぱり、しゃべってる……。半泣きのオレ。

ぴよんとオレから少し離れて、フサフサとシッポをふる動物。その可愛らしい動作にうっかり少し和まされたオレは、ようやくその動物が神社にいたあの動物だと気づいたのだ。

「オマエ……なんなの？なんで喋るんだよ……。」

動物が喋るなんてまだ信じられないでいたが、疑問が大きすぎて思わず動物相手に話しかけてしまう。

「そりゃあオイラ達はキツネビトだもの。遠い祖先はニンゲンだよ。」

「

「キツネ…びと…？」

ぽかんとするオレを他所に、動物は続けて言い放った。

「ここはキツネの国なんだ。」

キツネの国

言い放たれたその言葉を、オレの脳ミソはどう処理したもんか分からなかったようで、フリーズ状態のままその動物と見つめあう時間がしばし続き。ようやくオレの口から出てきた言葉が、

「お前……キツネなの？」

そう、その段になってようやく目の前の動物が犬でもなくネコでもなく、まさしくキツネだという事に気づく。キツネなんてテレビとか写真でなんとなく見たことがある位で、実際に見たことなんてなかったから分からなかったんだ。

「うん？だから、キツネビトだってば。」目の前のキツネ（に見える動物）は、当たり前前の事を何度も言わせるなよといった口調で答える。

「まあ待てココリ。」

何も状況を理解できずにいるオレに助け舟をだしたのは、キツネの後ろからオレの様子を伺っていたネコ耳のジイちゃんだ。

「こちらのニンゲン殿は、いきなりこのような場所に連れてこられて、困惑されておるのだ。われわれの常識とニンゲン殿の常識は違う。順を追って説明せねばならん。」

確かに、オレの知ってる限り喋るキツネなんて常識外の生物だ。とはいえ、喋る動物が実在しているのを目の当たりにした以上、とにかく説明を聞こうじゃないか。見た目はアブないけど、オレに危害を加える様子もないしな。

オレが少し冷静になったのを見てとったのか、ジイチャンはオレに向き直った。

「ニンゲン殿。信じられんかもしれんが、ここはキツネの国といってキツネビトが住む世界じゃ。ニンゲン殿の住む世界とは違う次元にある世界なんじゃ。ここにいるココリと共にお稲荷さまの神社にいたのは覚えておるかの？」

「え？ああ…。」現実離れた話に呆然としながらも、気を失うまでの記憶をたどってみる。このキツネの名前がココリだっていうなら、そう。

「そうだ、こいつに触ろうとしたら…落ちたんだ。地面の…下…に？」最後に疑問形になったのは、オレも状況が理解できていないからだ。

「はあ…、やはりそうじゃったか。あれほど注意せいと言ったに。」ジイチャンはため息をつき、ココリはしょぼんとうなだれる。

「ニンゲン殿は、ココリがニンゲンの国からキツネの国に帰ってくるのに、巻き込まれたのじゃ。まことに申し訳ない。」深々と頭を下げるジイチャン。それにならって、ココリもぴよんと頭を下げる。「オイラの不注意だった。申し訳ない！ニンゲン殿！」

オレは深々と頭を下げるココリにそおーと手をのばし、むんと抱き上げる。「わっ！なにすんだよ！？ちよつと！おい！」バタバタと暴れるココリ。

……このあつたかい感触は、作り物とかじゃなくてホントに生き物だ。ホントに、喋ってる…。

少し冷静になったオレは、大がかりなイタズラの線も考えてココリを抱き上げたのだが、改めて喋るキツネの实在をつきつけられてし

まった。

黙り込むオレに、下げた頭を上げてオレを見ていたジイチャンは話を続ける。

「われわれキツネビトとは、遠く古代に神狐様とニンゲンを祖に生まれた種族と伝わっておる。われわれを理解してもらうには、直接ニンゲン殿に見てもらっ方がいいじゃろう。」ジイチャンはココリの方に目を向け、「人型をみせてやりなさい。」と声をかけた。

その瞬間。ココリの姿がぐにやりと歪み、ぐんつと縦に伸びる。次の瞬間、そこに居たのは清潔な着物を身につけた、丸顔でくりくりした眼のオレより少し幼いくらいの子どもだった。

あまりの出来事に、言葉もないオレ。

「ニンゲン殿、オイラ達は人型とキツネ型と変わる事ができるんだ。」

その声は先ほどの喋るキツネ、ココリの声だ。そして、オレはその子どもの頭にフサフサしたものがくっついていていることに気づく。

これは……………ネコ耳、いやキツネ耳だ……………。

ゆっくりとジイチャンの頭にも目を向ける。そうか、ジイチャンは別にネコ耳変態じゃなかったのか。

オレ、とんでもないとこ来ちゃったかも……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2070y/>

キツネ国ものがたり

2011年11月5日02時09分発行